

プルデンティウス『シュンマクス駁論』 における古典的教養の活用

鎌田 伊知郎

序

本稿では、4～5世紀初頭のラテン・キリスト教文学において詩人として大きな地位を占めるプルデンティウスの著作『シュンマクス駁論(Contra Oratorem Symmachii)』〔以下『駁論』と略す〕を取り上げる。プルデンティウスはアウグスティヌスのように聖職者とはならず、貴族階級の教養人として一信徒として生涯を送った。アウグスティヌスは修辞学教師として出発し、次第に真理探究に傾斜し文学、詩作を退け、聖職者となるに及び多忙を極める司牧活動、聖書の研究、講解に大半の時間を捧げるようになる。『キリスト教の教え』の中で教養の積極的活用を説き、先行する教会内の聖職者における古典的教養の活用を指摘する。しかし、キリスト教の真理を宣明するために古典的教養は犠牲に供せられる。プルデンティウスはアウグスティヌスとは環境が異なる。キリスト教の真理を、教養ある非キリスト教徒、キリスト教徒に説く際に古典的教養を十分に活用しうる可能性が高い。真理を論ずるためには、教養を犠牲にし、全てを神に捧げることが必要となるかもしれない。しかし、論敵を圧倒し、キリスト教教理を提示するには、古典的教養を活用しなければならない。表現、描写を尖鋭化し、論駁する対象を徹底的に把握する必要が生じ、新たな文学的創作も可能となるのではなかろうか。

I

『駁論』を取り上げるにあたり以下のように問題を設定する。『駁論』は、キリスト教以外の宗教の主張を排撃する傾向が強い著作である。キリスト教擁護という目的の中で古典的教養の創造的な活用がなされるか、否か。なされるなら、どのような地平であるのか。

古典的教養の活用の仕方としては次の2つが考えられる。第一に、『駁論』は護教的色彩が濃厚で、古典的教養は、ローマ古来の宗教の異常さを示す素材となる。第二に、詩人プルデンティウスが自己の力量を誇示するために『駁論』を著した。いずれにおいても古典的教養は、素材の集積となり、創造的に活用されることはない。むしろキリスト教の享受と古典的教養の関係を問わねばならないであろう¹⁾。

Ⅱ

『駁論』の護教的傾向が如何にして形成されたか、成立事情を確認しよう。『駁論』は、アウグストゥス以来ローマの元老院に設置された勝利の女神像と祭壇に関わるシュンマクスとアンブロシウスの論争を背景にして成立した。議員らは元老院に入場し祭壇で香を焚いた、新皇帝への忠誠をもここで誓った。皇帝の幸福と帝国の繁栄への祈願も行っていた。このように祭壇と女神像は、ローマにとってなくてはならぬものとして、アウグストゥス以来、キリスト教の勝利まで存続した。382年グラティアヌス帝は異教に対して攻勢にで、祭壇と女神像を取り除き、神官、巫女への手当てを圧縮し、その特権を剥奪した。異教を奉ずる元老院議員は皇帝のもとに抗議の使節団を派遣した。団長は著作家としても名高い都警長官シュンマクスである。キリスト教徒側ではアンブロシウスが皇帝にキリスト教徒元老院議員の意見書を提示し、シュンマクスの皇帝との面会を阻止した。

383年には異教徒が反撃する。グラティアヌス帝が殺害されると、異教徒は皇帝殺害、イタリア・ガリア・イスパニアでの飢饉は神々の復讐であると主張した。若年のヴァレンティニアヌス2世にシュンマクスが謁見し、『上奏文 (Relatio)』を朗読した。『上奏文』で、シュンマクスは勝利の女神像撤去に抗議する。ローマに勝利をもたらした女神像こそが元老院の議論を神聖なものとした。ローマの伝統、過去の遺産こそ、次世代に継承すべきであり、父祖の慣習は最も大切なものである。神殿から、神官、巫女からの特権剥奪が神々の怒りを呼び飢饉をもたらした。真理、神性が何たるか、は多様な方法で探究される。大いなる秘儀への到達には一つの道だけでは不十分である。シュンマクスはこのような論拠をもって皇帝に諸宗教への寛容を求めた。皇帝の良識に訴えた『上奏文』は好意的に受け止められた。

しかしアンブロシウスの反撃が開始される。事の展開を知ると、アンブロシウスは『書簡 (Epistola)』17を皇帝に送り『上奏文』の写しを要求し、それに対する反論

を約束した。その反論は『書簡』18に収められている。アンブロシウスはジュンマクスの雄弁の才を一応は認めながらも、空虚な謬説を主張する詭弁と断定している。神キリストによる真理獲得を主張し、他宗教を一蹴し、論敵の誤謬を一貫して指摘するのである。

アンブロシウスはシュンマクスの主張を自ら以下の三点に要約し、反論を加える。

①ローマは、自らに世界統治を許したというローマ古来の神々を求めると主張するが、ローマの勝利はローマ人の勇猛さ、軍事力による。女神とは関係ない。②神官、巫女に公的補助金を給付すべきであると主張するがキリスト教徒の乙女らは何ももらわず、純潔を保つ。神の賜物で豊かである。給与、金銭で純潔が守られるのはおかしい。③飢饉は神々の復讐であると主張するが飢饉は長期化はしない。起こる地域も変わる。頻発する現象に過ぎない。

アンブロシウスの反撃により使節団は得るところなくして帰還する。この論争は、皇帝の統治を支える2大勢力間（元老院の異教勢力とキリスト教会）の政争の様相を呈する。この政争を決着したのはアンブロシウスの卓越した雄弁であった。

以後、テオドシウス帝は異教への攻撃を強力に行い、異教の神殿を取壊し、異教の祭儀を禁止する。テオドシウスの死後ホノリウス帝の時代に異教への攻撃がやみ、女神像と祭壇が再設置される。この情勢に対して、ブルデンティウスは、アンブロシウスのシュンマクスへの反論を論拠として援用し『駁論』を著した。

Ⅲ

『駁論』は異教徒に対するアンブロシウスの反論の論調を引き継いでいる。

では『駁論』の内容は如何なるものか。この詩にブルデンティウス自身が期するところは、(作品集の)『序 (Praefatio)』に記されている。「ローマが異教徒の祭祀を踏みにじり、偶像を滅ぼすように」(40~41)。『駁論』第1巻冒頭の序ではブルデンティウスはシュンマクスの雄弁をパウロに噛みつき死毒を放つ蛇に準え、蛇は払い落とされ毒も表皮にとどまるに過ぎないと主張する。テオドシウス帝がローマから異教という誤謬、死病を除いた。しかし未だローマの内部は病んでいる。病を徹底的に除去しなければならない(1, 1~41)。テオドシウス帝が篡奪者を殺害しローマに帰還すると、ローマには蒼い霊、黒い偶像が飛び交い黒雲がたれこめ、闇に覆われていた。人人は森の奥深く犠牲を捧げ、臓物を血とともに飲み干す。宮廷では淫行がなされる。

テオドシウス帝は篡奪者，国家転覆を謀るカティリーナの如き人物を追放するだけではない。神殿や聖所を彷徨い，人々の魂に地獄の闇，苦悶を送り込み，体内に毒蛇を放ち，骨髄に毒を混じらせる敵（異教徒）を根絶する（1, 408～543）。

これらの記述において、『駁論』第1巻末尾（1, 541～）のローマの回心（ローマが我にかえり，異教祭儀を打ち捨てる。貴族らは神官の衣を脱ぎ捨て，ナザレ人〈キリスト〉の至聖所，使徒の泉へと駆け込む。人民も盲従していた偶像から解放される）を前提にしつつも，異教（敵）への勝利が強調されている。テオドシウス帝の勝利を，異教のもたらす魂の病毒の根絶によるローマ自身の再生ととらえている。キリスト教徒皇帝による篡奪者の撃破を前提にした再生が強調されるのである²⁾。

第2巻ではシュンマクスの主張に対して，アンブロシウスの論点を踏襲し反論する。ここではブルデンティウスの反論がアンブロシウスと同様か，異なるのか，異なるならばどの様な点か，が問題となろう。第2巻冒頭の序では，ベテロの水歩行を取り上げ，キリストに，流れ（シュンマクスの弁論）に飲み込まれる自分を助けるように祈願する。さらに，次のように主張を展開する。伝統，慣習よりも信仰の方が優れている（2, 91～369）。都市の守護神は万物の創造者に比べれば無に等しい（2, 370～487）。多くの神々がローマを導いたというが，ローマの世界支配はキリストへの道を供えた。混乱した世界，精神には神は訪れない（2, 488～633）。白髪のローマは若返った。ポレンティアでの勝利はキリスト教帝国への神の保護のしるしである（2, 634～772）。神に達するのはキリスト教信仰のみ，他の道は地獄行きである（2, 773～909）。飢饉は頻発する。巫女の供儀は，闘技場の殺し合いと同質な陶酔をもたらす。（2, 910～1113）。供儀，剣闘士の殺し合いを廃止し，罪を知らぬローマが神に身を捧げるべきである（2, 1114～1132）。ここでも第1巻から続く，異教攻撃は変わらない。全能の神への賛嘆に貫かれ，ブルデンティウスは，ポレンティアでのローマ皇帝の勝利を歓呼し迎え，キリストに導かれ，ローマ帝国を天へ引き上げる皇帝の統治への賛嘆を表明する（2, 756～758）。ブルデンティウスは，全能の神を拝するキリスト教の妥協を知らぬ護教的傾向によりローマの統治者らの事蹟も徹底的に批判，諷刺する。全能の神を拝する故に排撃したローマの歴史を，全能の神の支配貫徹の視点から再構成する。しかも第2巻91～269節では永遠の神，創造主への信仰を説いている。キリスト教の勧めが基調をなすのである。

アンブロシウスは相手の論法の不条理を突く。ブルデンティウスは問題となる対象

を自ら、論敵も行わぬほど詳細に描き出す。神々がローマを支えず、勝利に導かなかったことを指摘し神々の醜態を描写するのである。

醜悪なものを徹底的に描くが、プルデンティウス自身も卑小な人間である。彼は言う。至高の神の神秘を見抜こうとすれば、視覚は撃たれ、心力は疲弊し、倒れ伏す(2, 94~103)。神を見、理解することはできない。しかし人間は神が与える永遠で神的な贈り物により神を信ずる(2, 104~123)。しかし人間が接触し、誘われ虜となるのはこの世の甘美さ〔黄金、宝石、名声、栄達、所有地〕である。この世は利益を正義に優先させるが、処罰は稀である(2, 149~160)。この世の甘美さとは実は無法の醜悪である。人間は、醜悪を味わいつつも、峻厳な神の威嚇を恐れ(2, 172~184) 辛苦の中で正しき道をとるべく力の限り戦う(2, 149~150)。

アンブロシウスは『書簡』18, 9で、キリストの死、神性に言及している。キリストの神性により信ずる者が死ななくなる、と指摘しキリストが異教の神、崇拜物に優ることを強調している。しかしキリスト(神)の被造物への関わりに重点があるわけではない。プルデンティウスは第2巻において、全能で永遠の神を信じることを勧めながら、人間が働く時代、世界を取上げる。彼は言う。神は人間に不滅のもののみならず、甘美な味わいの滅びる世界をも与える。(2, 132~160)。神の栄光が肢体に流れ込み、自分の住処とする。神が、人間に五感を挙げて神に天上に向き続けるように勧告する。神が人間を取上げ神性の中に移した(2, 256~269)。神論ではなく、肉体に神の栄光が注がれたことが重要な論点となっている。

プルデンティウスはローマの過去の歴史の醜態、醜悪を描き糾弾する。しかし、ローマ自身に、老いを捨て生まれ変わり、世界の顔とされた、と告白させ(2, 655~665)、第1巻末尾ではローマ(父祖、貴族、人民自体が異教を捨て、キリストの聖所に駆け込む)の回心の様を歌い上げる。しかもローマは異教祭儀から解放されねばならないと主張し、祭儀を行う巫女の傷心、身体に注目する(2, 1064~1113)。プルデンティウスは断罪、審判のみならず、新生に注目する。彼が異教祭儀を描き徹底的に攻撃するのは、ローマの回心を願うからである。

IV

巫女は異教にとり純潔な存在であった。だからこそプルデンティウスにとっては異教批判の恰好の素材となったのである。巫女の心は除去すべき病を抱えるローマの精

髓である。プルデンティウスは巫女をリアルに描くが、善悪の判断を求め、巫女の存在の是非を直接議論するのではない。巫女が、ローマの祭儀から解放されることを期待し巫女を取り上げる。

巫女については、ジュンマクスが『上奏文』3, 14で取り上げる。彼は言う。巫女が、国家の安寧のために、清らかな身を捧げる。皇帝、ローマ軍の武運長久を、全ての人々のための祈りをなす。だから特権を享受すべきだ。ここで問題となるのは巫女が本当に清らかか、否かである。巫女が清らかでなければ、ジュンマクスの主張は成立しないであろう。『書簡』18, 11でアンブロシウスは、巫女のための特権という考え方自体が、巫女の純潔の存在を否定する、と主張する。純潔は無償の、しかもまず利得、富への欲望を退ける点に清らかさを有するが、巫女の純潔は、多くのもの（国庫からの給付）を与えられてやっと成立していることになるからである。『書簡』18, 12ではキリストに従う乙女を取上げ対比する。巫女と異なり飾らず、華美な深紅の衣装は身につけない。まず金銭、利得への欲望に打ち勝ち、見返りを求めずに断食を行う。アンブロシウスは巫女の姿、行動を描写するのではなく、本来利得とは無縁の純潔が、利得を必要とする、という論理的矛盾を指摘するのである。

ではプルデンティウスは、巫女をどのように扱うのか。『駁論』第2巻1064～1065節で、「巫女の純潔の誉れとは何か」「いかなる定めで慎みの輝きを増すのか」と述べるが、巫女の純潔の価値自体を論ずるのではなく、巫女の境遇、行動さらに、精神状態を取り上げる。

幼くいたいけな子は意志を無視され、結婚放棄を強制され祭壇に捧げられる。この行為で幼女の心は傷つき、汚される。しかも結婚への望みは放棄できず、巫女としての勤めを果たした後に、老処女となり一人床に老いぼれ皺を持ち込む惨めな有り様に追い込まれる（2, 1066～1085）。巫女は自分が人々の好奇心を満たす見世物に過ぎないことを覚る（2, 1086～1090）。闘技場での歓喜、興奮、剣闘士殺害への熱狂が、帝国と人民のためになす祭儀の際の犠牲をさばく血に塗れた儀式に重なり合う。巫女は心を汚され、殺人、血に歓呼するようになる（2, 1091～1113）。プルデンティウスは純潔の名もとの異様な心の内部状態（傷心の殺戮への熱狂）を提示する。

この箇所とユウェナリスの『サトゥラエ (Saturnae)』を比較すると、プルデンティウスが巫女の行為、外的状態を倫理、道徳的価値判断で諷刺し嘲弄しているのではなく、巫女の心の、内的状態（血による興奮、歓喜）を捉えていることが明らかとなる。

ユウェナリスは『サトゥラエ』(3, 152~159)ではやはり剣闘士を取り上げるが、剣闘士を売春宿で子をなす卑しい行いをなす者として捉え、不品行を示すための例として用いる。ブルデンティウスは剣闘士の競技を楽しむことが道徳的にみて卑しいことだと、述べてはいない。競技、殺し合いの堪能、歓喜自体を取り上げる。狂気を受け入れる異教の神の異常性を強調する。『サトゥラエ』(4, 8~10)では欲望に身を委ね、純潔の誓いを破った巫女が生き埋めにあうことを述べ、巫女が欲望から解放されてはいない不道徳を嘲弄する。しかしブルデンティウスとは異なり、欲望に身を委ねる際の巫女の内的状態を提示はしない。『サトゥラエ』(3, 34~38)では競技場で剣闘士の殺害に興奮しても、結局帰りにには公衆便所を借りる群衆の愚行を嘲弄する。しかし群衆の興奮を捉え、群衆が興奮から解放されることを願いはしない。ユウェナリスは、ブルデンティウスとは異なり対象の内的状態の変貌を問題とはしない。

ブルデンティウスは、純潔という概念や巫女の外的状態ではなく、巫女の内的状態を攻撃の対象として把握し提示する。さらに、続く1114~1132節で過酷で残忍な競技、祭儀の廃絶を訴える。「罪を知らぬ…(中略)…黄金のローマに罪を犯させるな」。

『駁論』も護教論として、攻撃性が強い。古典的教養を駆使し巫女の傷つけられた心の醜悪さを描写する。しかし、神が人をすでに神性に移したという理解を前提とし、醜悪な存在自体の変貌をも期待する。つまり天上に、神に向かうことを強制するのではなく、存在の変貌を尊重する。巫女の内的状態の執拗な描写は徹底した攻撃と巫女の存在への肯定が交錯したところに生まれた。

結 論

護教的傾向がもたらす徹底的な対象化と、救済がもたらす存在自体への徹底的な肯定が交錯する地平で、古典的教養の創造的活用がなされる。

註

以下のテキストを使用した。ブルデンティウスの『シュンマクス駁論』及び『序文』は、M.P,Cunningham AVRELIU PRUDENTII CLEMENTIS CARMINA (CCSL126)。シュンマクスの『上奏文』3は、MGH VI, 1. アンブロシウスの『書簡』17及び18は、PL16。ユウェナリスの『サトゥラエ』は Budé 版による。

1) 先行する諸研究はどのような見解を有するのか。A) ブルデンティウスの著作を

古典文学の影響という観点から検討する。古典文学，古典的教養の要素を多く認め，さらに古代末期の貴族階級の教養との共通点を指摘する〔Charlet, Thraede〕。これらは，本文中の第二に近い。B) 古典文学，教養の諸要素を十分に認めつつも，キリスト教の教えを説くのが基調であるとする〔Fontaine, 家入〕。特に Fontaine はラテン・キリスト教会の護教論，非キリスト教徒論駁の無名の詩との共通点を認めつつ，さらに古典文学の諸要素の充分かつ新たな活用を指摘。本文中の第一を前提にしつつも文学的な新たな創造を認め，第二をも包含する立場である。

- 2) これには，キリスト教の異教への勝利，テオドシウス帝とキリスト教に改宗した元老院議員の異教徒グループへの勝利，さらに『駁論』第2巻 709～720 節にみられるスティリコ率いるローマ軍のゴート族への勝利が反映していると考えられる。